

## 広島市における統合保育の実態調査(2)

— 担任及び加配保母を対象として —

若松 昭彦・船津 守久

(1996年9月10日受理)

### An Investigation of the Realities of Nursery Schools Practicing Integration in Hiroshima City (2):

— Focusing into the nursery school teachers  
in charge of children and temporary nursery teachers —

Akihiko WAKAMATSU and Morihisa FUNATSU

136 nursery school teachers and 113 temporary nursery teachers working in the nursery schools admitting admission of handicapped children in Hiroshima city were investigated by questionnaires. We examined the relationship between the nursing experiences and the extent of understandings for handicapped children, and considered the troubles and worries of temporary nursery teachers.

The main results were as follows:

1. The inexperienced temporary nursery teachers were troubled about the way of understanding feelings of children and also making the personal relationship with them. On the other hand, the experienced temporary nursery teachers carefully considered the personal relationship within children, the development of the behaviors in daily life, and nursing staffs' cooperation.
2. In some nursery schools, temporary nursery teachers were worried about human relations with nursing staffs.
3. We can say that it is important for all nursery teachers to have the nursing experiences with handicapped children to go on with integrative nursing smoothly.

*Key words*: nursery school, integrative nursing, temporary nursery teachers, questionnaires, 保育所, 統合保育, 加配保母, 質問紙調査.

#### はじめに

近年、障害を持つ幼児の保育を一般の保育所や幼稚園で行う統合保育の実践が広がりつつある(井田・小山・柴崎, 1992; 清水・小松, 1987)。広島市においても、昭和58年には公私立計23か所の保育所が、合わせて38名の障害のある子どもを受け入れていたが、障害児保育実施保育所数及び対象障害児数とも、その後年々増加し、平成8年度には計75か所の保育所で合計154名の子どもを受け入れるに至っている。こうした状況に対応す

るため、広島市は平成3年度より、保育所の障害児保育担当保母を対象とした研修会を行っている。そこで、船津・若松(1995)は、平成6年度の研修会に参加した計121名の保母に対し、園が受け入れている子どもの様子、子どもと関わる上での配慮点や悩みなどに関する質問紙調査を実施した。しかしながら、この調査では一般の保育経験については尋ねていないため、障害児保育経験のない保母の方が、障害を持つ子ども1名に対し一日4時間配置される、いわゆる加配保母の必要性をより強く感じているという結果に、この保育経験の

要因も関与している可能性が推測された。この点について明らかにしようとするのが、本研究の第一の目的である。また、上記の保母研修会には、平成7年度より加配保母に対するものも追加された。この加配保母を対象とした調査結果より、特にクラス担任等との関係を中心にした加配保母側の意識について検討することが、本研究の二番目の目的である。

## 方法

### 1. 調査対象・方法

平成7年度の「障害児保育保母研修会」は、障害のある子どもを受け入れているクラスの担任（以下、担当保母と記す。）を対象とした研修会と、加配保母を対象とした研修会の2つからなっていた。前者は同年6月20日に行われ、51名の担当保母が参加し、後者は同27日に実施され、40名の加配保母が参加した。また、平成8年度には、担当保母対象の研修会が、障害児保育経験1年未満の担当保母を対象とした「初級保母研修会」と、経験1年以上の保母対象の「中級保母研修会」に二分された。開催日、参加人数は、各々同年6月21日、41名と同26日、44名であった。また、加配保母研修会は同年7月2日に行われ、参加者は73名であった。調査対象は、これらの保母全員であり、担当保母計136名、加配保母計113名である。各研修会当日、研修会の講師である船津が調査用紙を配布し、自由記述による回答を依頼した後、その場で回収した。

### 2. 調査項目

調査項目は、園が現在受け入れている障害を持つ子どもの人数、年齢、性別、困っていることなどを中心とした子どもの様子、その他に対応に困っている子どもの様子、子どもと関わる上で日頃心がけていることや悩んでいることであり、船津ら（1995）で用いたものと同一である。また、園名の記載も同様に記入者に一任した。一方、今回は保母としての経験年数と障害児保育の経験年数を記入する欄を、質問項目の末尾に設けた。

### 3. データの分析

本研究では、前述の研究目的との関連から、調査項目のうち子どもと関わる上での心がけや悩み

を分析の対象とした。また、平成8年度のデータについては、これらの中より、さらに保育者間の関係や加配自体に言及した記述のみを抽出した。

## 結果と考察

### 1. 平成7年度担当保母の保育上の配慮点

表1は、平成7年度担当保母が日頃子どもと関わる上で心がけていること（以下、配慮点と記す。）について、船津ら（1995）と同じカテゴリで分類したものである。担当保母51名中、障害児保育経験1年以上の保母は29名おり、うち19名が、のべ32の配慮点を記述していた。また、障害児保育経験1年未満の保母22名中15名から、のべ25の記述が得られた。なお、文末の数字は、それぞれ保母経験年数と障害児保育経験年数である。

表1を見ると、「観察」と「遊び」の領域では、障害児保育経験1年以上の保母側の記述が多くなっており、この結果は船津ら（1995）と一致していた。一方、それ以外の領域では両者の差は認められず、先の研究と異なる結果となった。この理由としては、障害児保育経験1年以上の群でも、その経験が3年以下の者が大部分を占めていることや、初任者に対する研修の充実、保母経験年数の影響などが推定されるが、その検討は今後の課題である。

### 2. 平成7年度担当保母の保育上の悩み

表2は、平成7年度担当保母の保育上の悩みについて、やはり船津ら（1995）と同じカテゴリで分類したものである。障害児保育経験1年以上の保母19名が、のべ20の、障害児保育経験1年未満の保母13名が、のべ16の悩みを記述していた。

表2からは、「子どもとの関わり等」の領域では、障害児保育経験1年未満の保母の記述が多い傾向がうかがわれ、これは船津ら（1995）と一致していた。しかしながら、「保護者との関係」、「他児との関係」については、障害児保育経験1年以上の群に記述が多くなっており、これも上記と同様の理由によるのか、それとも障害児保育経験1年未満の側に、そこまで考える余裕がないのかは不明である。

ところで、この結果と船津ら（1995）との最も大きな違いは、後者の障害児保育経験群には加配保母との連携の問題などに関する指摘が見られ、

広島市における統合保育の実態調査（２）

表１ 平成７年度担当保母の保育上の配慮点

	障害児保育経験１年以上	障害児保育経験１年未満
子どもの気持ち	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもの話をしっかりと聞き入れる。2-2</li> <li>・子どもの言う事をしっかりと聞く。1-1</li> <li>・気持ちをしっかりと受け入れ、理解していく。20-3</li> <li>・楽しかった、頑張ったという思いを持ってくれるよう、一人一人の思いを受けとめている。19-3</li> <li>・できる事は他児と一緒にやることを促すが、無理強いはしない。15-1</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・気持ちを受けとめる。2.25-0.25</li> <li>・子どもの指差した内容や気持ちを理解しようとしている。16-0</li> <li>・子どもの気持ちを受容する。4-0</li> <li>・個々の子どもとしっかり関わり、気持ちが安定できるようにしたい。5-0.8</li> </ul>
観察	<ul style="list-style-type: none"> <li>・要求をしっかりと見て、なるべく自分で行動できるように見守りながら、補助していく。20-1</li> <li>・本当に理解して行動しているのかどうか気をつけて見ていく。19-1</li> <li>・行動を見守り、落ち着くまで待つ。21-4</li> <li>・見守ることを大切にしている。14-2</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生活習慣を細かく見ていっている。9-0.25</li> <li>・問題行動の理由を考えられるようにする。10-0.5</li> </ul>
触れ合い	<ul style="list-style-type: none"> <li>・乳児の場合は身体に触れる。15-1</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・スキンシップをとる機会を多く持つ。2-0</li> </ul>
遊び	<ul style="list-style-type: none"> <li>・一日一回は短時間でも関わる。21-4</li> <li>・発達に応じた遊びなど工夫していきたい。14-2</li> <li>・何かを指導しようとする前にかく関わりを持ち、人間関係を作る事を大切にしている。12-2</li> <li>・1対1の関わりを大切にしている。14-2</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・関わりを多く持つ。2.25-0.25</li> <li>・一日一回は声をかけ、関わるようにしている。22-0</li> </ul>
言葉かけ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・一人一人の名前を呼ぶ。15-1</li> <li>・全員に言葉をかける。15-1</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・目が合わない子に、目を見てゆっくり話す。2-0</li> <li>・一日一回は必ず全員に声かけする。3-0</li> </ul>
ほめる	<ul style="list-style-type: none"> <li>・あらゆる遊びで自信を獲得できるように、共感したり、ほめながらするようにしている。14-3</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・小さな事でも一緒に喜ぶ。20-0</li> <li>・できない事ができた時には自分の事のように喜ぶ。22-0.4</li> </ul>
メリハリ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・だめな事は繰り返し知らせる。15-1</li> <li>・基本的ルールを守り、他児に迷惑のかかる行為には注意を与えている。22-3</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・いい事、悪い事をはっきりと知らせていく。3-0</li> <li>・喜びや怒りを大きく表現して、はっきり伝えたい。20-0</li> <li>・してはいけない事は一貫性を持たせる。2.25-0.25</li> </ul>
笑顔	<ul style="list-style-type: none"> <li>・明るく接する。4-1・目を合わせて笑顔で接する。19-1</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・余裕を持って、なるべく笑顔で。4-0</li> </ul>
教育的		
自立	<ul style="list-style-type: none"> <li>・できる事は、なるべく一人でできるようにする。1-1</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・待つ事も大切。4-0</li> </ul>
保育	<ul style="list-style-type: none"> <li>・いろいろな経験ができる場を作っていく。4-1</li> </ul>	
他児との関係	<ul style="list-style-type: none"> <li>・態度や心がけが他児にも影響するので、やさしく話すようにしている。10-2</li> <li>・いろんなクラスで自然に受け入れて過ごす。20-3</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・世話をする他児を認めながら、見守るよう話している。9-0.25</li> <li>・仲間意識を持って生活したり遊んだりできるように心がけている。17-0</li> </ul>
保護者		
保育者間	<ul style="list-style-type: none"> <li>・加配保母と話し合う時間を設ける。21-4</li> </ul>	
園		
その他	<ul style="list-style-type: none"> <li>・障害の子も自分達と同じだという気持ちを持つてるようにしたい。18-5</li> <li>・活動的で落ち着きのないクラスなので、月２回ラジオ聴取をしている。17-1</li> <li>・差別的な行動をしないようにする。2-2</li> <li>・子どもと一緒に感動できる気持ちを大切に。11-1</li> <li>・安心して過ごせるクラスになるよう心がけている。20-3</li> <li>・安全面に気をつけている。14-2</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・気分で接しないようにする。10-0.5</li> <li>・信頼関係を深めるため、心に余裕を持って接していくように心がけている。5-0</li> <li>・自分が嫌な事は人にしないようにする。22-0.4</li> <li>・信頼関係を培うこと。16-0</li> <li>・個々に応じた関わり方をする。4-0</li> </ul>
計	32	25

末尾の数字は、保母経験年数－障害児保育経験年数を示す。

表 2 平成 7 年度担当保母の保育上の悩み

	障害児保育経験 1 年以上	障害児保育経験 1 年未満
保育のゆとり	<ul style="list-style-type: none"> <li>・障害児と関わりにくい。17-1</li> <li>・クラスの中で前後関係が見れず、子どもの要求が分からない事がある。21-4</li> <li>・全体のクラス活動に手一杯で、個人的な援助、関わりが十分にできない。4-1</li> <li>・35名のクラスで、加配保母のいない午後はゆっくり関われなかった。13-1</li> <li>・加配は午前だけ。午後から関わろうとすると、他児への関わりが薄くなる。12-2</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・個々の子に対応していくのが難しい。1-0</li> <li>・ゆっくりと 1 対 1 で関わる時間が持てない。22-0</li> <li>・関わりを多く持つ事が難しい。2.25-0.25</li> <li>・加配保母がいない時は、手が回らない。9-0.25</li> <li>・加配保母がいない時、絵本読みの途中で急に奇声をあげたりすると困る。20-0</li> </ul>
保育者間	<ul style="list-style-type: none"> <li>・園での生活に追われ、加配保母との意識統一が難しいところがある。10-1</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・保母同士で話し合う時間が少ない。10-0.5</li> </ul>
保護者との関係	<ul style="list-style-type: none"> <li>・家で親子の触れ合いをしてほしいが、母親に伝えることが難しい。14-2</li> <li>・早生まれで幼いという母親の思いがあり、関わりが甘く、何でもしてしまう。22-3</li> <li>・親が遅れを認めていない。コミュニケーションがとれない。15-1</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・保護者に会える時間が少なく、コミュニケーションが不十分。10-0.5</li> </ul>
他児との関係	<ul style="list-style-type: none"> <li>・何をしても、他児が許してしまっていて、その子を怒らさずにあきらめている。19-3</li> <li>・障害児として見ていない他児に、その子の軽い障害をどう伝えていったらいいのか。19-1</li> <li>・他児のからかうような態度が見られ始めた。10-2</li> <li>・クラスの子に、どのように障害の子の事を伝えたらいいのか。18-5</li> <li>・イヤ、汚いなど言う子がおり、説明した方がいいのかどうか対応に悩む。11-1</li> <li>・子ども同士の関わり方。13-1</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・行事や設定保育が多く、別な事をする時に他児にどう説明するのかわからない。1-0</li> <li>・障害児と他児をどの程度同じようにするべきか、特に参観日の時など迷っている。20-0</li> </ul>
他の悩み	<ul style="list-style-type: none"> <li>・加配保母のいる子以外の問題のある子数人に振り回されて、クラスが落ち着かない。17-1</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・イライラして怒鳴ったりしてはいけないという自分と生身の自分で接してもという思いで悩む。5-0</li> </ul>
子どもとの関わり等	<ul style="list-style-type: none"> <li>・気持ちの読み取り、理解が難しい。3-2</li> <li>・どこまで手助けするべきか、どこまでやらせるべきか。20-1</li> <li>・TVマンガの話以外はあまり話してくれない。2-2</li> <li>・どこまで運動の制限をするのか、どこまでやっていいのか分からない。10-1</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ある子どもの行動、原因が分からず気になっている。10-0.5</li> <li>・表面的な事は理解できても、その裏まで見抜けないような気がしている。3-0</li> <li>・子どもの気持ちをどこまで受け入れ、どこから引くのかわからない。3-0</li> <li>・他児と変わらないんだという意識で接するようにしているが、とても難しい。2-0</li> <li>・気持ちの受けとめが難しい。2.25-0.25</li> <li>・してはいけない事に一貫性を持たせるのが難しい。2.25-0.25</li> </ul>
計	20	16

末尾の数字は、保母経験年数－障害児保育経験年数を示す。

一方、未経験群は加配保母の必要性をより強く感じていたのに対し、本研究では両者間の意見にあまり差が認められないことである。ただし、加配保母に関する記述からは、障害児保育経験 1 年以上の群に若干の余裕が感じられなくもない。また、加配保母に言及した障害児保育経験 1 年未満の保母 2 名の保母経験年数は 9 年、20 年と決して短いとは言えず、この結果は、たとえ保母経験が豊かでも、障害児保育経験が少ないと担任として困る事が多いという仮説を支持するものであろう。しかし、この結果だけでは不十分なため、後述のよ

うに平成 8 年度のデータについても同様の分析を行った。

### 3. 平成 7 年度加配保母の保育上の配慮点

表 3 は、平成 7 年度加配保母の保育上の配慮点について、障害児保育経験年数別に分類したものである。加配保母 40 名中 33 名が、のべ 54 の配慮点を記述していた。

障害児保育経験年数が 1 年未満の群を見ると、子どもの気持ちの理解や接し方など、子どもとの関係作りに関する内容がやはり多くなっている。

広島市における統合保育の実態調査（２）

表 3 平成 7 年度加配保育士の保育上の配慮点

障害児保育 経験年数	保育経験 年数	保 育 上 の 配 慮 点
7	14	問題行動を目にした時、慌てないように、大声をあげないようにしているが、なかなか難しい。
7	7	口の方が先に思っているように思うので、一緒に行動したい。
7	7	自分で出来る事を少しでも伸ばしたい。
6	15	言葉かけを抑えて、自発的行動を待ちたい。
6	15	～君の先生と言われたいよう、距離を持って接する。
6	8	見通しが持てるよう、「～したら～しようね」とゆっくり話す。
6	8	” やりたい ” という気持ちを大切に。
6	8	スキンシップ。
6	8	頑張ったらほめる。
6	8	してはいけない事をしたら、嫌な気持ちを伝えていく。
4	8	言葉が出始めており、保育士を介しての段階だが、他児との関わりを持つように配慮している。
4	3	一人で生きていける生活の基礎は厳しく、その子の出来る範囲で出来るよう心がけている。
4	3	子どもが手を引いたり呼んだりした時には、すぐに対応する。
3	16	子どもとコミュニケーションをとる。
3	16	他児の遊びに無理に入れようとせず、見守る。
3	10	目を見て話しかける。
3	10	体の触れ合い。
3	10	遊びの中で他児と接する場面の仲介を多くする。
3	10	担任と自分が伝える事に食い違いがないように気をつけている。
3	6	しっかりスキンシップを持って、明るく接したい。
3	6	自分で出来る事を少しずつ増やしたい。
3	3	どのクラスの子にも声をかけるようにしている。
3	3	自分の事は自分で出来るようにしたい。
2.6	14	子どもの立場に立って考えられるようにしたい。
2.6	14	楽しい関わり方が出来るようにしたい。
2	12	自分で出来るように、頑張る気持ちを大切に。
2	8	まずは子どもの行動を受け入れ、それから皆で考えていく。
2	8	本人の気持ちを大切にしていける。
2	5	目線を同じにし、話を聞いてあげる。
2	4	いつもゆったりとした気持ちで接していく。
2	3	その子に合った、またはその日の子どもの様子に応じた関わり方、言葉かけをする。
2	2	家では厳しくされているようなので、とにかく温かくゆったりとその子を受け入れたい。
1	7	自分自身が楽しい気持ちでいられるように思っている。
1	6	次の活動の見通しを持たせる言葉かけ。
1	6	体を動かして、歌で語りかけをしていく。
1	5	多くの言葉かけ。
1	5	母親があまり接していないので、スキンシップを大事に。
1	5	していい事と悪い事の区別。
1	3	いつも横にではなく、他児との関わりの中で言葉が育つように速くから気配りをしたい。
1	3	特別扱いをしない。
1	3	自分で出来る事は時間がかかっても待つ。
0.5	0.1	出来る限り受け入れる。
0.5	0.1	明るく楽しい場作り。
0.5	0.1	何か出来たら大いにほめる。
0.5	0	朝の声かけで、子どもが返す声と表情に気をつけている。
0.3	1	話をする時には、顔を見て話すように心がけている。
0.0	8	難聴の子の担当なので、簡単な手話を教えてもらっている。
0.0	5.4	やさしい目、言葉かけなど、表情に気をつけている。
0.0	1	気持ちをなるべく理解し、楽しく遊ぶ。
0.0	0	笑顔で接する。
0.0	0	していい事と悪い事の区別。けじめをつける。
0.0	0	子どもの気持ちを受けとめる。
0.0	0	声かけを多くしている。
0.0	0	話しかけてきたら、同じ目線で話を聞く。

表4 平成7年度加配保母の保育上の悩み

障害児 保育経 験年数	保母経 験年数	保 育 上 の 悩 み
7	14	つきっきりにならずに子どもを見たいが、その加減が分からない時がある。
6	10	言葉に関する保護者の意向を踏まえて、絵のついた文字で遊んでいるが、続けるべきかどうか。
5	7.5	加配として、どこまで手を出していいのかわからないまま、保育していることがある。
4	3	補助すると行動範囲が限られるので、時々自由に行動させたいが、事故の危険性もある。
3.5	3.5	専門的知識に欠けるために対応に悩むことがある。
3	10	最近、よく唾を吐いて遊んでいるが、その理由は何か。
3	10	専門的な勉強をしていないので、不安である。
2	12	午後からは担任が大変なようで、一日加配がつくようになってほしい。子どもの力を知る難しさ。
2	2	言っただけでも、毎日困った行動をするので悩んでいる。
1	3	自閉的傾向の子どもと他児との仲立ちが難しい。
0.5	0	活発でどこに行くかわからない担当の子にかかりきりになり、他児の相手をすることができない。
0.3	1	調子が悪い時には、自分で動こうとしなかったりして、どう接していいかわかることもある。
0	1	担当の子どもよりも、わがままな子への対応が難しい。
0	0	最初に何でも許してしまったので、子どもにとって逃げ場の存在になってしまった。
0	0	どう接していけばいいのか、他の保母に聞いたりしながら接している。

一方、生活の自立、他児との関係、保育者間の連携、活動の見通し等についての記述は、障害児保育経験年数1年以上の群に多い傾向が認められる。

#### 4. 平成7年度加配保母の保育上の悩み

表4は、平成7年度加配保母の保育上の悩みについて、障害児保育経験年数順に並べたものである。15名から15の悩みが出された。

表4より、やはり子どもとの接し方や関係に関する悩みが、障害児保育経験年数1年未満の群に多いことが示唆される。一方、他児との関係や行動の自立などについては、障害児保育経験年数1年以上の群に多い傾向がうかがわれる。また、専門的知識の不足に関する記述が2つ見られており、担任への言及は1つだけに止まっている。

また、配慮点に比べて記述数が少ない理由は定かではないが、初めての研修会ということから、何らかの構えがあったことも考えられる。園名の記入率が50%と担当保母の場合の82%と比較して低いことも、その表われであろう。加配保母が記

入しやすい質問紙の工夫なども必要であったかも知れない。さらに、今回は分析の対象にしていなが、他の調査項目で担当の子どもに関する悩みを既に記述したことも影響しているであろう。

#### 5. 平成8年度担当保母の加配保母に関連する配慮点及び悩み

表5は、平成8年度担当保母の保育上の配慮点及び悩みについての記述から、加配保母に関連する箇所のみを抽出し、障害児保育経験年数順に並べたものである。計85名のうち、15名から配慮点が、3名から悩みが得られた。なお、悩みは少なかったため、括弧に入れ配慮点と共に示した。

表5を見ると、加配保母と子どもとの関係作りに関する記述が、障害児保育経験年数1年未満の群に見られている。一方、障害児保育経験年数1年以上の群には、加配保母との役割分担や協力で触れた記述が多くなっている。さらに、前年までは見られていた保育者間の意識統一や指導の一貫性などの問題が指摘されていないことも特徴的で

表5 平成8年度担当保母の加配保母に関連する配慮点及び悩み

障害児 保育経 験年数	保母経 験年数	保育上の配慮点及び（悩み）
4	29	十分な援助が出来にくいので、加配保母の援助で十分に受けとめられるようにしている。
3	20	クラスの中の一人として、全体的な指導を行い、加配保母に細かい援助をお願いしている。
3	20	午睡をしないので、加配を10時～14時にしてもらい、午睡についてももらった。
3	14	問題行動を持つ他児に影響される子どもに対して、加配保母とも協力して関わっている。
2	23	日常の世話は、担当の決まった保母がするようにしている。
2	20	加配保母とよく話し合い、役目をはっきり区別して考えながらも、一貫した関わり方を心がけている。
2	20	できるだけ何らかの形で接しているが、午前中は加配保母に任せている。
2	19	園全体の職員集団も支え合えて素敵。しっかり関わられるよう加配保母がほしい子どももいる。
2	8	なるべく全体の中の一人という見方で、特別な援助は加配保母をお願いしている。
1	7	加配保母も全員一致で取り組んでいる。加配保母がベテランで、安心して保育できる。
1	2	（加配保母と子どもが二人だけで活動という時がある。また、午後からは十分手が行き届かない。）
0	25	（加配保母がいない午後は、障害の子だけに関わっていると、他児が落ち着いて行動できない。）
0	13	体を動かすなど子どもの好きなことを加配保母と一緒に十分楽しませて、ストレスを発散させる。
0	5	加配保母との二者関係になることから始めていこうと思う。
0	5	（障害児保育についてよく知っている加配保母に頼り過ぎており、どうしていいのか迷っている。）
0	3	興味を示さない活動では、加配保母と一緒に無理なく過ごすようにしている。
0	2	加配保母と子どもの関係作りから始めている。
0	0	加配保母に抱きついたり、作った物を見せるといった行動が少しずつ始めている。

ある。加配保母に対する研修が始まったことと関連がある可能性も推測されよう。

ところで、加配保母に関する悩みは3つだけであり、これらは全て加配保母の必要性と関連したものであると言えよう。また、これらは障害児保育経験年数1年以下の保母から出されているが、彼女らの保母経験年数は各々2年、25年、5年である。データ数が少なく、結論を出せる段階ではないが、この結果もまた、保母経験が豊かでも、障害児保育経験が少ないと担任として困る事が多いという仮説を部分的にも支持するものであろう。

#### 6. 平成8年度加配保母の担任等に関連する配慮点及び悩み

表6は、平成8年度加配保母の保育上の配慮点及び悩みについての記述から、担任や加配自体に関連する箇所を抽出し、それぞれ障害児保育経験年数順に並べたものである。計73名のうち、5名から配慮点が、11名から悩みが得られた。

まず、表6と表4を比べると、平成8年度は担任等についての悩みが急増していることが明らかである。研修会も2回目となり、参加者も増えて、悩みなどを率直に出せる雰囲気になったことが考えられる。担当保母の82%と比べると、まだ少ないが、園名記入率が63%に増加していることも、

表6 平成8年度加配保母の担任等に関連する配慮点及び悩み

障害児 保母経験 年数	保母経験 年数	保 育 上 の 配 慮 点
3	8	担任の保育のやり方を早く理解して、なるべくでしゃばらないようにする。全体の援助の役割の立場。
3	6	子どもに合った指導について担任と常に話し合いながら進めている。
3	4	職員のチームワークは良い。
2.3	9.3	担任との協力体制を大切にしている。3名で協力する事で、安心して午後から帰れるようになった。
2	8	担任が全体に話した事を、もう一度本人に理解できるように話している。
		保 育 上 の 悩 み
7	5	障害児の先生と理解している他児とのコミュニケーションが弱く、注意しても聞かない事が多い。
5	14	2年間の保育計画を園長、担任と話し合いながら進めているが、目標の設定等難航している。
4	8	専門的な教育を受けた事がないうまま、保育をしている。
2	14	加配保母の立場、どの程度障害を持つ子に関わるか、担任との兼ね合い。
2	8	クラスの問題に悩んでいる担任の手伝いをしていいのかと悩んでいる。
2	0	ぐずっている時、担当保母が促すとする事も、加配保母には甘えているのか、しない。
1	1	午後から障害を持つ子3名を見、他クラス33名にも関わらねばならず、大変。どんな障害を持つ子にも一律4時間の加配では、無理が出てくるのではないか。
1	10	他の保母と話し合える時間をもっと持ちたい。コミュニケーションをとり、共通理解を図りたい。
1	6	他児の保育の邪魔にならない為の加配ではなく、何か意味のある加配になりたいのだが。他の担任の意識、認識。園、先輩、上司、長への希望の伝えにくさ。
0	4	加配保母としての経験が少なく不安。
0	0	担任との関わり方。

このことの反映であろう。研修においても、お互いが悩みや疑問などを出し合ったり共有したり出来る、小グループでのバズ・セッションのようなものも検討する価値があるように感じられる。

次に、表5に示した平成8年度担当保母の加配保母に関する記述と比べると、加配保母側の悩みは多く、そのギャップの大きさは重要であろう。保育者間の連携がうまくいっている園のケース・スタディ的な研究が今後は必要かも知れない。これに関して、特に印象的な記述は、表6にもあるが、「最初、4時間で昼に帰る加配とは何かと悩んだ。いつもそばにいただけでなく、クラス担任2人と協力することに気持ちを切り換えてから、安心して他の先生に任せて帰ることができるようになった。」である。2人担任という体制も関係しているかも知れないが、参考までに紹介した。

続いて、表6の悩みを見ると、担任との関係に関するものが5名と最も多く、これらは障害児保育経験年数が2年以下の保母から出されている。各々の保母経験年数は14年、8年、10年、6年、

0年である。この結果からは、加配保母も2年間程は他の保育者との関係などで悩む時期があり、それは保母経験とはあまり関係していないことが推定される。

## 全体的考察

### 1. 保育経験の要因について

平成6年度の担当保母に対する調査結果で特徴的なことの1つは、障害児保育経験のない保母の方が加配保母の必要性をより強く感じている一方で、障害児保育経験のある保母側には、そうした記述は見当たらず、逆に加配保母との連携に関する問題の指摘が見られ、両者が好対照をなしていたことであった。しかしながら、一般の保母経験がこの結果に及ぼす影響については、データ不足のために検討できなかった。本研究においては、平成7、8年度ともに、保母経験年数は長い障害児保育経験の少ない保母に、加配保母の必要性に関連する記述が認められた。これらの結果は、保母経験が長くても、障害児保育経験が少ないと



担任として困るのではないかという仮説を支持するものである。換言すれば、保母経験よりも障害児保育経験の方が、障害児も含めたクラス運営にとって、より重要な要因であることが示唆された。当然のことではあるが、障害を持つ子どもとの関わりの経験を積むことが、統合保育を円滑に進めていくためには欠かせない条件であると考えられる。さらに言えば、このことは学校教育現場においても当てはまるのではないだろうか。ただし、これらのデータは量的に少なく、今後も引き続き検討すべき課題である。

一方、障害児保育経験が長くなると、加配保母との協力や役割分担がうまくいっているという記述は多くなるが、加配保母がいない時困るという悩みは全く出されていない。加配保母がいない時に障害を持つ子のいるクラスをどのように運営しているのかに関する情報が、障害児保育経験の少ない保母にとっては重要なものであろう。今後の調査では、この点についても考慮していく必要があると考えられる。

## 2. 加配保母の意識について

平成7年度の結果からは、経験の浅い加配保母は、子どもの気持ちの理解や子どもとの接し方など、子どもとの関係作りに配慮したり、悩んだりしている。一方、経験のある保母は、子どもと他児との関わり、子どもの行動や生活の自立、保育者間の連携などに配慮する傾向がある。また、平成8年度の結果からは、経験の少ない保母は担任との関係などでの悩みも多いことが示された。言わば、初任の加配保母は大人にも子どもにも気を遣って大変だと言えよう。研修等での相互の情報

交換や最初に悩み、疑問などを聞いた上でのスーパーバイズなども必要かも知れない(片山・片野、1993)。

また、担任との関係などでの悩みは、保母経験年数にはあまり関係していなかった。加配保母の場合には、むしろ過去の担任としての経験が、担任を援助する立場への切り換えを難しくする可能性も推定されよう。しかし、より重要なことは、加配保母は担任との関係や保育者間の連携などで悩んでいるが、担任側からは、それらに関する悩み等がそれほど出されていないことであろう。そして、一方では、両者がうまく協力している園も報告されている。今後の研究においては、このような保育者間の協力関係がいかにして成立していくのかを探るための調査項目も盛り込んでいくことが望まれる。

## 文 献

- 船津守久・若松昭彦 1995 保育上の配慮を要する子どもに関する調査研究—広島市における保育所保母を対象として—。平成6年度科学研究費補助金一般研究(B)「特別な教育的配慮を要する児童・生徒」の治療教育に関する基礎的研究(研究代表者 田口則良)研究成果報告書, 73—82。
- 広島市 1996 平成8年度新規採用保母研修資料。井田範美・小山 望・柴崎正行編著 1992 基礎から実践までの障害児保育。ひかりのくに。
- 片山義弘・片野隆司編 1993 幼児教育・保育講座15 障害児保育。福村出版。
- 清水貞夫・小松秀茂編著 1987 統合保育—その理論と実際—。学苑社。